



TITLE:

辛亥革命直前における農民一揆 (特集 中國近代史の諸問題)

AUTHOR(S):

波多野, 善大

---

CITATION:

波多野, 善大. 辛亥革命直前における農民一揆 (特集 中國近代史の諸問題). 東洋史研究 1954, 13(1-2): 77-106

ISSUE DATE:

1954-04-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/138996>

RIGHT:

# 辛亥革命直前における農民一揆

波 多 野 善 大

## 一 序 章

辛亥革命の前年一九一〇年（宣統二年）夏、華南・華中を視察した人の報告に、當時の清國農村に瀰漫していた不満をのべた興味ふかい左の一節がある。

夫レ清朝ガ國勢ノ衰頽、列強跳梁ノ厄ニ鑒ミ、奮テ立憲ヲ宣布シ、極力其ノ籌備ニ任ズ。其ノ大望毅力欽スベク佩スベク、計決シテ不可ナルニ非ズ。法亦適當ノモノ少カラザルベシ。然ルニ、新政施行以來國用多端稅捐漸ク急ニ、政令未ダ改進ノ功ヲ收ムル能ハザレバ、民人毫モ新政ノ利ヲ感ゼズ。一方物價ハ騰貴シ、不幸ニシテ凶作連リニ來リ、民生日ニ窮乏ヲ告グルノ日ニ際シ、地方到ル處財用枯レ、餘裕ノ新政舉辦ニ資スベキ無ク、將來益々收斂撞克ノ政策ニ出デザルベカラズ。茲ニ至リ民又心ヲ安ンズル能ハズ。（中略）今ヤ清國上下ノ民ハ、一般ニ新政ヲ以テ暴民ノ虐政トナサザルナク、怨

嗟滿地、其ノ上ヲ見ル仇敵ノ如シ。而モ民ノ新政ニ反抗スル所以ノモノハ、決シテ新政其ノモノニ對シテ反對スルニ非ズ、彼等ハ寧ロ新政ノ如何ナルモノカハ之ヲ了解セズ、タダ地方ノ貪官汚吏ノ此ノ間ニアリテ新政ヲ口實トシ新稅ヲ加徴スルモノアルガ爲ニ、遂ニ彼等ハ反對シ激發スルニ至レルナリ。近時ノ地方騷亂ノ多クハ、實ニ土匪無賴ノ徒ニ非ズシテ、是等貪官汚吏ノ爲ニ挑發セラレタル良民ノ一揆ナリ。

これによつてわかることは、變法派の讀書人や學生が熱心に唱道し、一九〇六年（光緒三十二年）には憲政豫備の上諭を發せざるをえなくなり、憲政編查館が中心となつて進めていた立憲政準備のための新政が農民には全然理解されていなかったのみでなく、それを口實にする貪官汚吏の新稅加徴によつて農民を一揆にかり立てていたことである。しかも、天災による凶作と米價の騰貴が、この傾向を一層

重大化していたのである。この農村における一般的な不満と一揆への激發は、辛亥革命前の一、二年を特色づけるものであり、これは、また、農民が革命に組織される地盤となったものである。清朝に對しては、各階級がそれぞれ異なった不満をもっていたのであるが、辛亥革命直前における農民の不満が如何なるものであり、それが如何にして一揆へ激發されたか、それを幾分具體的に明かにすることは、辛亥革命の理解に資することはもちろん、中國における農民運動を理解する一つの手がかりにもなるものである。

ところで、辛亥革命前一、二年間における農民一揆を、その主たる原因によつて、(一)選舉施行の準備としての戸口調査によるもの、(二)新稅加徴によるもの、(三)アヘンの栽培禁止によるもの、(四)米價の騰貴によるもの、(五)その他の原因によるもの、の五種に分類することができる。もちろん、これは便宜的なものであつて、多くの場合、前掲の報告書の一節にもあつたごとく、貪官汚吏あるいは劣紳が、これらの新しい行政處置を機會に新稅を加徴したことに窮極の原因の存していた場合が多く、右の分類は機械的外面的ではあるが、一應この便宜的な分類にもついで、もっとも

重要な(一)―(四)の一揆について考察をすすめてゆきたい。

## 二 戸口人口調査による農民一揆

戸口調査は、國會議員選舉を施行するための準備として必要であつたのみでなく、地方自治、教育の普及、民兵の徵集、租稅の整理、に基本となる戸籍を整備するために、民政部において制定し、光緒三十四年(一九〇八)十二月十日勅許された「調査戸口章程」にもついで全國的に行われたものである。この章程によると、第一次には戸數を、第二次には口數を調査し、戸數調査は宣統二年(一九一〇)十月までに、口數調査は同じく四年十月までに完成する豫定であり、巡警道(巡警道のまだおかれていない省は布政使)を總監督、各知府、同知、通判、知州、知縣を監督、地方自治董事會總董または郷長を調査長、地方自治の董事または郷董を調査員として實施されたのである。その調査經費は各地方において捻出することになっていた(章程第二十五条)ので、このために新稅が加徴され、これによつて戸口調査に反對する農民一揆となつたことが多かったが、これについては次の項にゆすり、ここでは戸口調査の主旨を誤

解したために生じた紛擾についてのべることにする。

戸口調査によって一揆の起ったのは江西省がもっとも早く、宣統元年（一九〇九）の中頃には、江西省内の各地にこの問題が起っている。戸口調査をもって「抽丁當兵」按人勒税のためであるとして反對妨害したのは當然であるが、「人名を簿冊に記入すれば、その人は七日のうちに必ず死傷する」とか「鐵道の建設には必ず多くの靈魂によってレールを安定させねばならぬが、この靈魂をとるためだ」とか、徴兵を蒸兵と誤解し、「釜むしされるのだ」とかいふた語言がとんで、農民を一揆にかりたてた。翌宣統二年になると、江蘇、浙江、廣東、雲南、安徽の各省にも起っている。

江蘇省宜興縣では、一月の戸口調査に際して、「男女の生辰をとって鐵道を修築し、黃河の鐵橋を安全にするために用うのだ」という謠言がひろまり、調査員が學務委員であつたので學校を仇視し、銅鑼をならして人をあつめ、學校を焚き、學務委員の家をたたきこわした。

四月安徽省の南陵縣北郷においては、王某なる遊方醫が、「わしは江蘇省の泰興縣方面から來たもので、この目で見

てきたのだが、あの地方の戸口人名調査冊が「たび役所に送られると、その家はすぐ皆のものが死亡したものだ。この調査冊は鐵道の建設に用うもので、枕木を安定させたり鐵橋を支えたりするものだからだ。お前たち、早く帳簿をとりかえしてこい！」といったので、愚民はその言葉を信じて、皆調査員の處へ行って草冊をとりかえそうとした。

また下東郷の宜南に隣接する西河鎮では、數百人が調査員某の家におしかけて、その家を取かこみ、「草冊を出せ！出さないと必ず火をかけて家を焚くぞ！」と叫んだ。某は人をやって縣に報告させ、知縣が出向いて解散させた。翌日の夜上東郷の浦橋地方では、客民の雷某が數百人を嘯聚し、調査員李開基（自治）研究所教員潘崇基の家を打こわし、また地保某の家もたたき毀した。この夜西郷でも調査員の家が郷民にかこまれたが、すぐ草冊をわたしたので難を免れた。二日後の晩、東郷の清弋江鎮では、千餘人が一方では（巡）警局をとりかこみ、一方では各調査員の家に行つて草冊を出させたが、一時は「人聲鼎沸、磚石如雨」であつた。この晩浦橋地方では郷民の餘憤なおやまず、（自治研究所？）教員秦良楷、葉維楨、葉書有三人の家をたたき

こわした。このため戸口調査を停止せざるを得なかった。<sup>5)</sup>五月和州においても調査員の家が打毀されたが、その理由は「中國は極貧だから、百姓の生庚八字を外國人に賣り、延長五百里の鐵道を築造するのである」とか、「橋梁をささえるには五尺につき一人（の八字）が要るのだ」とかいうのであった。江蘇省如皋縣の顧家塚でも教育委員（學董）の顧西安が調査事務を兼任し、各丁口の生年月日時を詳しくきいたところ、郷民は當局の告示にはただ歳だけを調査することになっているのに變だと疑惑の念をもっていたところへ、某家で三人が病死したのでいろいろの謠言がとび、「學校は八字を外國人に賣るのだ」というので、寄り集って學校打毀しの相談をしていたが、郷民の敬服していた顧西安の兄が出向いて解散させて事なきを得た。ところが、のち、典史の李某、縣丞の曾某がやってきて地保をとらえて答つこと四百、謠言を放った者を出すよう命じた。そこで郷民數千人が呼び集められ、すぐ役人の轎をぶちこわした。曾縣丞は微服して逃れたが、李典史は兩頬をひどくたたかれ、丁役二十餘人もなぐられて逃げ歸った。郷民は顧西安をなぐりつけ、臀部をひきさいた。また南郷の夏家園

では數千人が集って戸口冊をとりかえそうとし、また花園頭莊の孫開泰、曹徵祥らの家をうちこわし、隣接の范家・郭家・印家などの莊では郷民が銅鑼をならして、一、二千人をあつめ、董宅の學校を打こわそうとして勇兵に彈壓された。<sup>7)</sup>

浙江省長興縣では、巫覡が「戸口は外國人に賣って、海塘築造の用にするのだ、早くとりかえさないと三十日のうちに省衙門に送られるままにしておくと、八月二日には必ず全部死んでしまうぞ」といいふらした。その上知縣文海の作った「調査須知」の中に、一百戸を調査すれば洋銀一元を給するといふ一條があつたので、ますます謠言を信じ、七月十三日、白阜埠一帯では銅鑼で人を集め、十四日の晩、李家村の郷董張禮門の家をうち毀した。<sup>8)</sup>

### 三 新稅加徴による一揆

新稅加徴が一揆の原因となつたものの中には、その加徴の口實となつたものが、戸口調査、學校、地方自治、巡警などいろいろある。

雲南省昭通府の魯甸縣、恩安縣では、戸口調査や門牌編

釘のため果物税（果捐）を徴することにしたところ、農民數千人がこの新税の創案者李清世、羅履中らの家をたたきこわした。<sup>9)</sup>また、江蘇省宜興縣の戸口調査では、すでにのべた謠言のほかに、每名二十文を徴收したことが農民を激發した原因であった。<sup>10)</sup>蘇州崑山縣では、毎戸から紙筆費三十文あるいは五十文を徴收したので、郷民がさわぎ出したが、紳董の密告により縣の方で郷民を勸諭したので、大事に至らず、ただ二、三の調査員が毆傷されたのみであった。泰州の徐家莊では郷約の某が戸口調査のとき每名十文を徴收して問題となったが、莊董がこれを知ってそれをもと通り返還させ、以後再び戸口調査に關係させなかった。そこで某はこれをふくみ、「この調査は實に官紳が百姓の生庚を洋人に賣り、魂魄を用って橋を造るのだ」といって郷民を煽動し、莊董の家をたたきこわした。<sup>11)</sup>

このように、戸口調査が新税加徴の口實となったほか、戸口調査が、農民に新税加徴の危惧をいだかせ、これによって一揆となったものもある。

廣東新安縣の西郷では、戸口調査員鄭善鈞と訴訟で争っていた鄭文貫が、「鄭善鈞たち調査員は、金を出して調査

員になったのだから、門牌を偽造してから必ず戸口人丁税を徴收するのだ」といいふらして婦女を煽動したので、（宣統二年）五月十五日朝、固戍村では婦女數百人が調査員姜宜の家におしひいて惡罵をあびせた。十六日朝、鄭善鈞が調査長馮潤霖と縣城に行こうとすると、婦女たちはすぐ銅鑼をならして集り、二人をその家におし返し、家屋に投石した。十八日には上川村、固戍村などの婦女千餘人が集って縣署におしかけ、知縣にせまって調査員を撤する公示を出させて解散したが、この後六月にかけて戸口調査に對する婦女の抗拒がつづき、これが各郷に影響し、遂に調査を中止せざるを得なくなった。<sup>12)</sup>

學校經費の加徴または加徴の疑惑によって一揆の起つた例は、非常に多い。學校の設立は、一部富裕な地主にとつては恩恵になるが、大部分の農民には何の利益にもならない。その上、學校を口實とする加税の一部は、多くの場合つぎの諸例でもわかるごとく、一部郷紳の私腹をこやすものであった。ここに學校經費を名目とする加徴が、農民の憤激をかった理由がある。そしてこの場合には、一揆の襲撃目標が學校や學校運営の中心人物の住宅であつたのは、

當然である。さきにも述べた戸口調査による一揆においても、學校が襲撃されているのは、戸口調査が學捐加徴につらなり、またその疑惑をおこさせたことにも原因する。時には僧侶の仇學もあつたが、これは寺宇をこわし、寺産を沒收して學校をたてることが行われたからである。<sup>13)</sup>農民の學校襲撃（いわゆる毀學）は、學校設立が盛になつてきた光緒三十年（一九〇四）以後から各地におこり、辛亥革命の前年には頻發している。<sup>14)</sup>

江西省袁州府宜春縣北郷の農民は、宣統元年八月の初旬、數日にわたつて縣城を包圍して外援をたち、入城して學校をうちこわし、學務委員を皆殺しにしようとした。これは、官僚側の言によれば、郷紳盧元弼が每石十文の學捐に五十文を加徴したことによるといわれ、學務委員らの主張によれば、府縣の統計處が圖捐（村稅）として毎圖（村）拾串を課し、府統計處二、縣統計處八の割に分配するはずであつたが、この加徴によるものであるという。<sup>15)</sup>これは、この記事の筆者がいうごとく、いすれにしても、小民の膏血をしぼつて官紳の身家を肥すものであつた。<sup>16)</sup>

浙江省慈谿縣では、郷民が毎年三月迎養していた城内の

東岳會の會田を沒收して、學校の費用にあてようとしたので、郷民は城内の各學校を焚いたりたたきこわしたりし、教職員を毆傷した。上虞縣では、黃勒初が郷間に學堂を倡設し、いろいろ籌捐の名目を立てたが、王某がこれを誹毀したので縣へ逮捕處罰を請うた。王某は人を集めて逮捕を拒み、郷紳の家十餘家をぶちこわした。また王梅卿、王鶴生、張芹香らが自治公所を設ける名目で新稅加徴をやつていたが、三人はもともと評判のよくないものであつたので、郷人の怨をかつていた。こんなところへ慈谿縣での毀學のことが傳わり、二千餘人が入城して學務委員の各家を皆毀壞した。處州景甯縣でも沙溪學堂が襲撃されたが、これは知縣が巡撫に報告したところによると、この學校は光緒二十四年創設されて以來、塩稅と竹稅で經費を賄つていた。この兩稅は強迫手段で徵收され、毎年千餘金を下らず、學校經費を支出しても盈餘があつてこれを着服しているにちがいないとの噂がしきりであつた。その上、この學校は柳姓の子弟のみを入學させ、他姓の者は入學することができない。このように衆姓の納める稅によつて一姓の子弟を教育しているというので、郷民の怨をかつたのであるといふ。<sup>17)</sup>

浙江省於潜縣の郷民は、學校關係の諸税を免除してもらおうとして、(宣統二年)六月、數百人が聚つてこれを縣當局に要求し、官立兩等小學および禁煙分所<sup>\*</sup>をうちこわし、<sup>18)</sup>長興縣合溪鎮の郷民は、その地の學校が屠戸<sup>リヤ</sup>、山貨牙行<sup>アラブヤムガイ</sup>から規費をとっているのをうらみ、七月、戸口調査の騷擾に乗じて調査員をとらえ、兩等小學(初等高等小學校)をたたきこわした。<sup>19)</sup>

\* 禁煙分所は、のちにのべるアヘン禁止についての事務をとる縣の役所らしい。中央に戒煙所、各省に禁煙公所が置かれたことは、大清光緒新法令、第五類、禁煙の部に出ている禁煙大臣奏禁煙查驗章程摺并章程(上奏本文のみは光緒東華錄、卷二一六、光緒三〇四年五月甲午—十日—の條にある)によつてわかる。

廣東省連州では、門牌編釘のことをきいた郷民は、これは學校のために人頭税(人捐)をとるためであるとの疑念をおこし、(宣統二年)七月、六、七百人が城隍廟内で抵抗の方法を協議した。守備隊長の頼景雲はその彈壓に赴き、門牌編釘は官府の方針から出たものではないと傳えさせた。このために各郷民は、これはてつきり學校のため人頭税をとるためにやるのであると信じこみ、毎日抗拒を協議した。

八月に入つて、匪徒の誘導もあり、城におしよせ、城門が閉ざされると城壁をこぼつて入城し、各種の學校や紳士の家をやいた。<sup>20)</sup>

つぎに、地方自治や巡警の經費を捻出するという名目の新税による農民一揆をみよう。地方自治は憲政完成の一階段をなすものであつて、光緒三十四年七月二十八日民政部の奏上した城鎮郷地方自治章程が、憲政編查館の核議を経て施行された。<sup>21)</sup> 光緒三十四年八月一日、憲政編查館と資政院とが會奏した「議會未開以前逐年籌備事宜」によると、光緒三十四年の第一年には城鎮郷地方自治章程を頒布し、翌第二年には、城鎮郷地方自治で自治研究所を設立し、第五年に至つてほぼ完了することになっていた。<sup>22)</sup> これは先のべた戸口調査とともに、憲政準備の基本として實施されたものである。ところで、自治經費は自治章程に規定されているところでは、(一)その地方の公款・公産、(二)その地方の公益捐、(三)自治規約によつて科する罰金、をもつてあつてゐることになつていた。<sup>23)</sup> このうち、農民に直接關係するのは、公益捐である。公益捐は、附捐と特捐に區別され、附捐は地丁の附加税として徴収するものであり、特捐は自治經費



として特別に徴収する新税であるが、二つとも農民の負擔を加重するものであったことにかわりない。二、三の例についてみよう。

河南省密縣では、地方自治籌辦處を開設するために毎畝百二十文を加徴することにし、宣統二年三月一日その納入を催促したところ、紳民憤激し、四日千七百餘人が入城して縣署の大堂、大門をたたきこわした。<sup>25)</sup> 葉縣では、各郷より自治經費を集めることにし、郷紳が各郷に赴いて自治の利益をととき、その經費を負擔するよう勸導したが、群集の反對にあった。その時一人が「自治は百姓を害するものだ。これまで新政をやらなくても、百姓は安樂にくらせた。今自治をや、巡警、學堂を設けるに、どれ一つとして百姓の負擔にならないものはない。従前の車馬差使は、正項と合せて毎畝百三十文であったが、今は毎畝三百二十文に増加している。現に又百姓の消費をもとめている。出費は小さいが、將來自治をうまくやると、國の外債が皆百姓の身にふりかかってくるだろう。この際はとても承諾できない。役人と郷紳とがぐるになって壓迫して、農民が一揆を起すのだ」<sup>26)</sup>

\*車馬差使——驛傳のための附加税だろうか。

などといった。たぐさんの聴衆は、皆同意した。のち酒税、六陳税<sup>ロクコン</sup>を加徴することにしたところ、各郷郷民一、二萬が集り、知縣の報告で巡撫から陸軍一個大隊を派遣して彈壓した。

長葛縣では、郷村に巡警を設けるために、地丁一兩につき三百文を加徴することを公示した。郷民は江湘知縣が新政に藉口して加徴することがこれのみでなく、すでに憤慨していたところとて、この公示をみてすぐ銅鑼をならして各郷に傳單<sup>\*\*\*</sup>をまわし、六月十四日東門外の五里圍に會衆して會議した。翌日知縣はこの風潮をきいてやってきて、どうしても加徴しなければならぬという告諭を出した。ときに郷民は五千七百餘人が集っていたが、これをみてすぐ隊伍をととのえて入城し、知縣の後を追って縣署におしよせた。知縣は勇兵を整列させて威嚇したが、郷民はそれをしりめに署内にあがり、手あたり次第物をたたきこわし、綠營の出動によってやっと解散した。しかし實は江知縣の意に出たものではなく、前任の潘知縣が稟定したもので、江知縣はそれにしたがったのみであったが、この郷民の反撃

にあり、自經せんとして救われ、睢州に轉任した。(河南長葛縣鄉民滋事縣署被毀—東雜、七ノ七、河南長葛縣鄉民滋事詳記—東雜、七ノ八)

\* 田地一畝につき、正賦、差錢、新政錢ですでに七百文をおさめ、これ以外の附加税がこの外にある。故に更に三百文を加徴すると、千四百文になるといふ。

\*\* 各村各堡父老兄弟同看。江官到任、即科派差錢、一年共派七次。吾民之力、實不能支。刻下江官又加派地丁錢。吾民性命必不保、屢次呈懇免繳、屢遭重責、官比差、差比民。吾民身家、行爲貪官所食。刻爲籌抵制之計。務望速至五圍里會議。不來者群起而反對之。

直隸州易州では、知州が病氣で、貧劣なその堂姪を代理にしていたが、自治局を開設してから、同局の運営にあたる郷紳張某祖某は、義倉の積穀を賣拂つて三萬餘吊を得た上に、二萬餘吊も課税徴收し、自治經費にあてるといふながら實は山わけして着服していた。(宣統二年)五月初旬になると張某らは又戸口調査を口實に毎戸錢を徴收した。郷民は久しく雨がなく、秋の收穫も望めないで、納税を承諾しなかった。すると張某は「新政をさまたげる奴は、役所に送つて處罰するぞ!」とおどした。郷民はおそれると

ともに憤激し、求雨<sup>アライ</sup>を口實に人を聚めて城にはいり、二度と自治經費の割當をしないよう州署に要求したが、知州は面接せず、郷民はますます憤慨し、二十一日にまた入城したが、知州はなお面接しなかった。たまたま開元寺の佛像がみな自治局の手でとりこわされているのを見て、久しく雨のふらないのは、自治局員や警察署長(警董)らが佛像をとりこわしたためだと思い、遂に自治局におしよせて、これを焚きはらい、中學校もやいた。まもなく雨がふつたので、郷民はみな歸農したが、代表百餘人は、(一)義倉の積穀の返還、(二)再び錢を徴收しないこと、(三)自治局員、警察署長を死刑に處すこと、(四)青二才を再び學堂、巡警に關係させないこと、(五)開元寺の佛像をすぐ原位置にかえすこと、(六)地方官は速かに農民のため雨乞祈願をすること、(七)劣紳の着服した學校經費、自治經費は二倍にして返還することなどを要求した。

この種の一揆としてもっとも大規模であつたものは、山東省萊陽縣の一揆である。萊陽縣でも、知縣と郷紳が學堂・巡警・自治・戸口調査などの新政を實施するにつき、油房捐(榨油店の税)、鋪捐<sup>フポイ</sup>、戲捐<sup>シポイ</sup>、廟產捐の新税を加徴したために、

于祝三、曲詩（士、思）文、その弟曲桂舟らはこれに反対し、城北八箇村が連合して連莊會を組織し、曲詩文を會長に推した。時に官紳が義倉の積穀を盜賣し、新政經費を口實として私腹をこやしていたのを郷民が憤激し、（宣統二年）四月十三日倉穀を清算することを口實に、數千人（萬餘人ともいう）が縣署におしかけ、（一）人頭税の徴收（每名銅元三枚を許可なく徴收していたという）廢止、（二）戲捐の撤廢（これは許可を得てすでに二、三年このかた徴收していた）、（三）錢糧の徴收に、銅元で納めても大錢に比し安値に計算しないこと、（四）郷民を苦しめた門丁、衙役（役所の雜役夫）および紳董、郷長は速かにとりかえること、（五）誰が侵吞したものであれ、往年の倉穀は速かにもと通りにすることの諸條件を要求し、知縣（朱槐之）にその示諭を書かせて解散した。ところが、十五日に僧道千數百人が縣署におしよせ、廟捐を増額しないことを要求し、書いてもつてきた「免提廟產諭」の草稿通りに寫して官印をおさせた。<sup>28)</sup> 知縣は巡防隊の出勤を請い（十六日）、僧道をとらえて（十餘名といひ二十餘名という）處刑した（十七日）。一方郷民は先に要求したことが實行されず、苛税が依然徴收されるので、五月六日また縣署をとり

かこんだ。しかし知縣は郷紳らに責任を轉嫁したので、巡警局董（警察署長）王景嶽の家をやき、<sup>29)</sup> その他高玉峯、陳玉德らの家をやいた。七日にも入城して郷紳の家をたきこわすつもりであったが、城門がしまっていたので、城西の九里河方面に駐屯し、「翌日<sup>ア</sup>は城を攻め役人を殺さにならん」といつていた。朱知縣は恐れて、巡防隊長の王鳳苞と城内の實業界代表に調停を依頼した。郷民はこれに對し、（一）地丁の徴收は規定にしたがつて一兩を大錢二千四百文とし、それ以外はビタ一文の浮收も許さない。かつ制錢、銅元でもその値を割引いてはならぬ、（二）官紳の盜賣した積穀は、全部知縣が代つて辨償し、すぐそれを出して貧民を救済すること、（三）各種の雜税は、今後一文も徴收してはならぬ、（四）自治局、教育會は、公正の紳士を選擧して運営させ、もし人を得なければ停止すること、（五）巡警は任意に鄉村に來て騷擾を起さないこと、（六）城内の紳士、商人は、全員で曲詩文が死刑にならない保證をすること、（七）陋劣な紳董は一律に退け、地方の公事に關係することをゆるさない、の諸條件を要求した。富商姜菊平が双方の間を調停し、十日に至つて解決し、知縣は次のごとく公示した。

一、局（自治局）董張尙謨、于贊揚を免職す、民衆の怒を起させたによる。

一、勸學董王圻、教育會長葛桂星、巡警局董王景嶽を免職す、同じく民衆の怒を起させたによる。

一、教育會廢止。

一、戲捐撤廢。

一、銅元は割引せず。

一、巡警は鄉村に赴くを得ず。

しかし、朱知縣が免職されて、新任の奎保が着任すると、縣賞によって曲詩文を逮捕しようとした。また、候補道楊耀林が兵をひきいて取調べにきた。二十五日馬連莊の呂七（呂瑞璜\*）が、かれの家に曲詩文がかくれていることを報告したので、楊耀林は陳忠訓に命じ、兵を率い縣の捕卒とともに馬連莊に向わせたが、曲詩文はすでにのがれ、呂七は銃殺された\*\*。郷民は呂七の殺されたのをみて憤慨し、郷民を糾合して道を遮り、各村もこれに應じて沿道で發砲し抵抗した。曲詩文は軍隊や捕卒の去ったのちまた回り、大兵が来ることをきいて大舉抵抗の決心を定め、傳單を出して各鄉村の各戸から人を出させ、糧草武器を準備した。集

るもの數萬人、四方の道路に關所を設けて、通行人を取調べた。六月四日、大舉城を攻撃した。これに對し、葉長盛（第五鎮第十協統領官）、李安堂（登州鎮總兵）の軍隊が進發しようとするところで、調停人からの申入れて、暫く進發を見合せていたが、楊耀林の請により六日進發、七日城西で曲詩文の民軍と戦った。民軍は極力抵抗したが、銃砲にうたれて逃散した。軍隊は各鄉村を搜索し、多數の民家をやき、多數の民人を殺し、掠奪強姦をほしにまにした<sup>30)</sup>。

\* 呂瑞璜は、直隸總督陳夔龍が命ぜられて調査したところでは、呂保璜とある。（山東萊陽縣官民交戰事續聞—東雜、七ノ八—）また山東京官柯劭忞らが都察院に具呈して代奏を請うたものによると、馬連村村長呂明の子呂保璜となっている。（東雜、七ノ十一、一六〇頁）。

\*\* 山東京官の調査したところによると、馬連莊の呂七ではなく、村外の李祺となっている。（山東萊陽縣官民交戰事餘聞—東雜、七ノ九—）

\*\*\* 陳夔龍によると「二萬餘人を下らず」となっている。

この事件は當時の世論をわかせ、山東出身の京官および左京の山東出身の商人は、曲詩文に味方して、直隸總督陳夔龍、巡撫孫寶琦らが曲詩文を「匪類」「無賴」とすること、に反對し、調査員を送って調査させ、「曲詩文には少しも

悪いところはない。これは知縣および劣紳がぐるになつて惡事をし、郷民を憤激させたために起つたので罪は貪官劣紳にある」とし、また曲詩文捜査に際しての軍隊の不法をならし、これによる縣民の死傷は四萬餘人にのぼり、「餓殍蔽野」といつている。<sup>\*</sup>（在京商號三千餘家が代表を公舉して、都察院に公呈したもの―東雜、七ノ九、七一頁―）したがつてこの兩方の報告は、官僚、郷紳、軍隊、曲詩文の行爲に對する批判を異にしているのは當然であるが、六月十二日の軍機大臣に對する上諭が、「曲思文が山東巡撫のいうごとく實に土棍であるとすれば、數日間に數萬人の群衆があつまつたというが、こんな多くの者が進んで曲思文に従つたのはどういうわけか」という疑問を投げかけていること<sup>\*</sup>、官僚、郷紳の營私橫暴、軍隊の暴虐はおおい得ないものであつたようである。

<sup>\*</sup> 陳慶龍は、查辦事緣由、實因紳民相讐、積嫌生變。雖各項雜捐、及侵吞倉穀、詳查尙無其事、而承辦新政經手款項之紳董、假公濟私、擅作威福、誠有結怨於民之虞。曲士文以一鄉曲無賴、竟敢假託公義、暗報私讐、迹其威脅鄉愚、私置槍彈、劫殺官兵、圍困城池、種種情形、實屬罪不容誅。とのべ、孫寶琦は、紳士王圻、王堰、罔利營私、請託賄賂、王景嶽恃勢斂

怨、實爲此案激亂之厲階。葛桂星、于贊揚、張相讓、宋維坤、把持武斷、均不理於衆口。曲士文與其弟曲桂舟、迭次糾衆圍攻城池、要挾官府、馴至戕害官兵、實恃有仇視新政抗拒得名之于祝三、陰爲謀主、以致惡膽益張。于祝三於二三月間、在唐家庵屢次結會、居心叵測、尤屬罪不容誅。とのべている。

<sup>\*</sup> 宣統政紀、卷三七、宣統二年六月甲午（十二日）の條。

この萊陽縣の暴動と同時に、海陽縣でも一揆がおこつてゐる。知縣方奎はこの年（宣統二年）春開徵のとき、地丁の正稅一兩に對し大錢三百六十文を加徴し、銅元であれば六割にしか計算しなかつた。紳士宋煊文らが改除を要求したが、きかなかつた。三月になつて自治の仕事をはじめると、房捐、畝捐、丁口捐などを加徴し、ついに落花生畑一畝につき大錢四千文、瓜畑一畝につき大錢一千文を課稅するに至つた。宋煊文はまた郷民をひきいて免除を請うたが、方知縣は顧みず、ために郷民の反抗をひき起す形勢となつた。知縣は宋煊文を投獄した。その次子宋璵吉は、知府の來縣を機に控訴したが、知縣はまたこれをも投獄したので、郷民憤激して望石山に屯集し、四月二十九日大舉入城して宋父子を助け出した。宋父子は郷民の騷擾を極力おさえ、人をやつて、避匿した知縣をさがし出すことを諸紳にたのん

だ。五月二日知縣がみつかり、宋父子の釋放を請い、郷民をなだめるとともに、郷民の破獄事件を彌縫しようとした。

知縣は望石山に至り衆に向つて咎を紳耆に歸し、宋父子を釋放し、郷民を解散させようとした。郷民は

一、積穀は總計八千石あるが、今年は不作だから、即刻發して貧民を救済すること。

一、錢糧の浮收毎兩大錢三百六十文を免除し、また銅元を安値に計算しないこと。

一、(自治)研究所・巡警局の課税八千兩は、その會計方で速刻納入すること。

一、馬差を免じ、再び供費を徴收するを許さない。

一、各郷の廟産は、各郷で小學校を設立する費用とし、再び官立學校のためにとり上げることはできぬ。

一、戲捐、舖捐の累年徴收した數目およびその支出は、明白に公示すること。

一、一切の新政經費は、ごまかしが多いから、公正な紳士を公舉して掌らせること。

一、税契トキゼイの浮收を免除すること。

一、郷民入城に際して兵丁のために四名が銃殺されたが、

規定にしたがつてこれを處罰し、郷民の冤をそぐこと。

を要求し、知縣が一一應諾して解決した。しかし、知縣が倉穀の盜賣、新政に藉口する諸税徴收の責任を郷紳に轉嫁したので、東郷の富紳樹德堂、仁術堂の二家は大錢三千五百吊をとられ、徽村の富紳趙世德は大錢二千五百吊をとられた。また逃匿した富紳數家の家はうちこわし掠奪にあつたが、かかる錢をとられ、家屋をこわされたものが、二十九件あり、大部分が村の耆老であつた。<sup>31)</sup>

右にのべた諸例は、新政の進行にともなう負擔の加重に對する農民の反應を示すものである。これらの報告が、細部においてはおそらく正確を期待し得ないものであろうが、新政によつて新税が加徴されたことは、重慶駐在英國代理領事(H.E. Sly)が、一九〇八年四月赴任以來一年半ぐらゐの間に、自治經費として豚一頭につき百文、煙館閉鎖に伴う税收不足を補うために、茶店のテーブル一卓につき一日十文、中央政府經費として豚一頭につき二百文および塩一斤につき三文の加徴が行われたことを報告していること<sup>\*)</sup>によつても否定できない。これにたいし、次にのべるアヘ

ン栽培禁止と、洪水とは、農民の収入源を破壊するものであつて、これに對する農民の一揆もはげしかつたのである。

\* 方知縣が郷に諭令して郷紳の錢穀を均分させたともいう(山東萊陽縣鄉民滋事將鄉董房焚毀—東雜、七ノ六、八二頁)。

\*\* Blue Book, Blue China No. 3 (1909) p. 48.

#### 四 ケン栽培禁止による一揆

アヘンの禁止は、中國にとって永年の懸案であつたが、國內的には日露戰後の中國にまきおこつたナシヨナリズムを基盤とした改革への熱意と、國外的には、キリスト教徒を中心としてアヘンの害毒を拂拭しようとする強い國際的輿論、および、中國に對する綿製品の出増大と、インドにおける茶業の發展<sup>\*</sup>によつて、對中國貿易バランスより見てアヘンにたよる必要のなくなつた英國においては、一九〇六年議會に壓倒的多數を獲得した自由黨が、輿論に傾聴してこれに協力する誠意を示してきたことによつて、禁煙政策が強くうち出されることになつたのである。<sup>32)</sup>

\* 中國の輸入貿易において從來第一位を占めていたアヘンが、綿製品にその地位を奪われたのは、一八八五年であつて、以後アヘンの總輸入額中に占める割合は減少し、一九〇五年に

	1886-7	1888-9	1893-4
セイロン	8	26	72
インド	78	95	114
中國	139	98	54

單位百萬ポンド

(Gundry, R. S., China Present and Past, London 1895, p. 117)

は綿製品の四〇・五八%に對しアヘンは僅かに七・六二%であつた。(Decennial Reports, (1922-31), Vol. 1, p. 180)。一九〇五年の英國よりの綿製品の輸入は、總額約五千九百五十萬海關兩(綿製品總輸入額の三一・九%)であつた。(Fong, H. D., Cotton Industry and Trade in China, 1932, Vol. 1, p. 249)。これに對し同年における中國より英國への茶の輸出は、約六百六十萬海關兩であつた。英國がインドのアヘンを中國へ輸出する必要があつたのは、中國から茶を輸入するに必要なだけの英國工業製品を中國に輸出することができなかったために、インドのアヘンを輸出し、印度へ英國綿布を輸出して決済する三角貿易を案出したのであつた。しかし、中國への綿製品(綿布：一九〇五年英國より輸入した綿製品中において綿布は約五千七百六十萬海關兩をしめる)の輸出は増大し、その上アッサム、セーロンにおける茶業の發展によつて、中國よりの茶の輸入が減少した。英國に輸入する茶が中國の獨占からアッサム、セーロンの茶にその地位を奪われるのは、一八九三—四のシーズンからである。かかる貿易の變化が、インドのアヘン栽培農民の生活、インド政廳

の収入を犠牲にしても輿論に耳をかたむけさせたのである。

光緒三十二年八月丁卯（三日）の禁煙に關する上諭は、<sup>33)</sup>

十年を期限としてアヘンの吸食栽種を禁絶する方針を明かにし、これにもとづいて、十月戊寅（十五日）に禁煙章程十條が制定された。<sup>34)</sup>これによると、ケシ畑を登録させて證明書を與え、この證明書のあるもののみに栽培を許し、毎年その十分の一ずつを減じてゆく方針であつた。したがって證明書も毎年更新する。州縣の官吏は不時に周巡し、かつ、十年の期限をまたすその管轄區域内のケシ栽培を全部禁絶し、その事實なることが證明されれば、その地方官は賞せられることになつてゐた。一九〇七年末には英國との協定が成立し、翌一九〇八年一月一日より英國は向う三年間毎年インドより輸出するアヘンを五千百箱ずつ遞減し、中國の禁煙に對する誠意を見まもることになつた。<sup>35)</sup>「……此機一失、時不再來。若永遠困於沈痼、勢必無以爲國。我君臣上下一念及此、能無愧悚難安、引爲咎責……」との上諭が<sup>36)</sup>出され、民政部は四月二十四日新に禁煙章程二十三條を奏定した。これによると、光緒三十四年に登録されたケシ栽培地面積の八分の一を毎年減少し、四十一年に至つて根絶

する方針であり、地方官にして、一年間に十分の三以上を減じ、騷擾を引起さなかつたものは、獎叙することになつてゐた。しかし、少量で高價なアヘンが、交通不便な中國内地において最も重要なキャッシュ・クロップ<sup>\*</sup>となつてゐたこととて、その作づけ面積の遞減が、農民の抵抗や不滿を惹起したことは當然である。もちろん、農民は、消極的には、ケシと小麥とを同時にまき、ケシのとりしまりがきつくないようなら小麥をひきぬき、取締りがきつまいようならケシをひきぬくといった方法をとつたであらう。しかし、<sup>35)</sup>つぎのごとき一揆に發展した場合も多かつたのである。

\* 交通不便な中國奥地におけるアヘンを、ロスはワシントン<sup>36)</sup>の時代におけるアレガニー山脈西方の開拓者が、トウモロコシをウィスキーにして市場に運んだことに比してゐる。

(Ross, F.A., *The Changing Chinese*, N. Y., 1911, p. 150)。

浙江省温州府では知府が管下の各縣を巡歴したところ、鄉民は知府がケシ栽培を嚴禁するものではないとの誤解した印象をうけ、舉つて作付を増加した。瑞安縣では（宣統元年）十二月鄉紳らが禁煙公（分？）所を設け、監視人を派遣して鄉間を巡視させ、かつ捕吏に賄賂をやり、事實を縣に報告して逮捕させた。知縣はケシ栽培を禁絶する宣誓書を



出させるとともに、重い罰金に處し、これを禁煙費用にしたが、これが十數件あった。翌年正月にはまた知縣が捕吏を率い、かつ親兵五十名を招募して、煙田のケシをぬきとらせるために、先ず大小港地方にやってきた。ところが、つれてきた兵や捕吏がケシを栽培している部落に、その戸數によつて食事を出させ、一回毎に數十卓を要した。またケシ栽培の多寡によつて捕吏の手數料(ケシをぬきとる)や兵費を出させたが、數十元から百餘元におよぶものもあった。郷民は最初官威を恐れて口には出さなかつたが、數日に及んでついにたえかね、各郷連合してこれ驅逐する計を立て、捕吏や兵が某村で銃聲をきいて逃げ出したのを見て、銅鑼をならし、たちまち萬餘人が響應して追襲し、十餘名を死傷させた。また、知縣と協同した郷紳の家をたたきこわし掠奪した。もっともひどくやられたのは、官吏の宿泊した王旦の家であつた。<sup>39)</sup>

樂清縣東郷大荆地方では、贖價すなわち、罌粟を栽培してある土地は沒收されるが、その面積に應じて金を出して贖回する費用が一八五一元餘、罰款すなわち禁令に違反してケシを栽培した罰金が一〇三八元餘、差費すなわち捕吏

の手數料が六〇一元餘(この中には知縣の家人門丁が強請したものをふくむ)を要した<sup>40)</sup>というから、禁煙實行によつて農民は収入源を失うとともに、莫大な失費を強要されたことがわかる。

台州仙居縣でも、知縣が管帶(大隊長)とともに百餘名の兵を率い、ケシを拔取るために南郷一帯に出向いた。村にはいつて村人にあえば、その村がケシを作つていようといまいとにかくわからず、名をあげて告發させ、少しでもさからえれば、たとえ眞に事情を知らない者でも、すぐ縣署に拘引して取調べた。それで、ケシ取締りの兵がやってくると郷農は皆逃げかくれた。坪峯山一帯の地方にきたとき、男はかくれて各村婦女のみであつた。時に知縣は縣城に歸つていたが、禁煙委員の吳某と管帶とが老人を引出してケシ畑を犁ですかせ、婦女にいたずらする。これを見た兵が各村に分散して強姦掠奪をする、といった有様で怨聲が高まり、つぎの諸條件を要求した。

(一)禁煙委員の吳某をよびかえすこと。

(二)縣令が郷村に出てケシを犁毀するときには、郷民を縣に拘引してはならぬ(以前知縣が數日間出郷犁毀したとき

には、郷民二十餘人を捕えた。かれらが縣署につくと、門丁や兵が賄賂を要求し、貧者は蕩産、富者も大變な失費であつた。

(三)まだ犁毀してない處は命じてぬきとらせ、兵差に一文も要求させてはならぬ(兵差はこの機會に賄賂を要求し、少しでもそれが満足させられなければ、すぐ縣に拘引して懲罰し、騷擾のたねとなることも多かつた)。

(四)ケシを作つておれば郷民も禁令をおかしていることを知っている。ただケシ田を犁毀し、またその苗をぬきとるだけに止め、その家を侵擾することがなければ、郷民も納得しないものはない。ただ多くの兵勇をつれてきてはならぬ。<sup>41)</sup>

山西省文水、交城兩縣地域は土地がやせ、耕作には適しなかつたが、咸豐年間ケシを栽培しはじめて以來、その良質を天下にはこつていた。それが宣統元年禁煙令が出て、郷民は突然失業することになった。交城縣では、知縣が地丁の納入を催促し、早く完納すれば來年はケシ栽培をゆるすといつたので、それを信じた郷民がケシをつくると、これをぬきとらせたので、二月初に一揆となつた。文水縣で

は、知縣が貪暴で、禁煙令を利藪とし、丁役を派遣して賄賂を要求し、出す餘裕のないものは拘引して嚴罰に處し、いろいろひどいことをした。農會委員が、ケシをやめて他の作物をつくれといつても、種子がないから、縣で資金を捻出して種子を買入れ、耕作面積に應じて分配し、地丁納入の際に一緒に返還させるようにするという案を出したが、知縣は、もし支拂のできないものがあると、自分が代つて辨償せねばならなくなるといつてとり上げなかつた。省から派遣された禁煙委員が、アヘンを禁じなければ國があふないと講演したに對し、「われわれの生活の道がすてになくなつてゐるのに、朝廷のことなどかまつてゐる暇があるか!」といつて大騒ぎとなり、兩縣とも省からの派兵によつて彈壓された。<sup>42)</sup>

このほかロッスも甘肅、山西、四川、福建の各地に起つた騷擾について報告してゐる(Op. cit., pp. 151-59)が紙面の都合によつて省略する。しかし禁煙政策によつていかなる問題が起つたかについての具体的内容は、右の數例によつて知ることができる。この問題については別に稿を起すはずである。

## 五 米價の騰貴による一揆

上述したとき政治上の諸改革にともなう農村の諸問題に加えて、宣統元年二年とくに二年五、六月の水災による揚子江流域の被害は大きく、いたるところ「一片洋洋、盡成澤國」、「淹沒之家、不可勝計」の状態となり、「秋禾全數、悉被淹沒」ことになった農民は、あるいは子供をうり女をひさいで生活をささえ、あるいは饑民となって都市に流入した。<sup>43)</sup>その上、米價の暴騰<sup>44)</sup>は農民を一層悲惨な状態に陥れ、各地に米騒動が頻發し、<sup>45)</sup>饑民の匪賊化によって土匪の活動が活潑化した。<sup>46)</sup>

安徽省南陵縣では、宣統二年二月米價騰貴のため郷紳らは米の他縣への移出禁止を主張したが、商人はこれに反対であった。知縣は十六日自治會議場をかり、この問題を討議したが、商人代表は、手持の米はまだ充分あるから移出禁止を行う必要がないと主張し、學務員の代表は、東北兩郷は昨年水災をうけ、聞くところでは、目下草根樹皮を食っているとのことである。他の各縣ではすでに皆米の移出を禁じているが、この南陵縣のみは異っている。食料がな

くて騷擾が起ったら大變である。商人は小利を食って大事をかもしてはならぬとのべ、集った千人を下らない郷民の拍手をあびた。商人代表は、目下の情況では街に米がなくなるまでには立至ってない。鄙見では四、五日まって街に買う米がなくなつてから移出禁止を問題にすべきだ、といったために會場は混亂した。知縣は黑板上に、「衆人不可喧嘩、本縣三日後禁河」と書いた。禁河とは、交通路である河を封じて米の積出しを禁ずることである。會衆は三日後になつて禁河すれば、南陵の稻米は全部搬出されてしまふと叫んで激昂し、振鈴によってやつと散會した。商人代表は門を出たところで、喊聲をあげる郷民に毆打された。

郷民の群衆は知縣をとりかこんで縣署に行った。知縣は衆人に對し、お前たちの希望をいれて、本縣では今晚米の移出禁止を公示する。もし明日米が河を下れば搶掠してよろしい、と諭したので郷民ははじめて解散した。しかし一方商人もその夜を徹して對策を會議したが結論が出ないまま散會し、十七日の會議によって翌日より店を閉すことを決定した。知縣は解決のために奔走したが、商人團は、(一)商人の意見に反對した學務委員三名を嚴罰にすること、(二)河

を下って搶掠された米三百石を賠償すること、(三)すでに賣却済になつてゐる米八千石が移出出来ないなら、當地の郷紳連中で買取り、平糶の米價は現在の市場價格と同様にすること、の三條件を要求し、知縣が第一條の要求に難色を示すと、翌日一齊に閉店した。郷民は罷市は百姓を餓死させようとするものであるとし、銅鑼をならして數千人が集り、商店を開かせ、開かない店はうちこわした。知縣、守備兵の隊長、警察署長は兵を率いてやってきて、空砲を放つて解散させた。しかし、郷民數千人は縣署におしかけた。知縣は、今日のところは退散せよ、もし明日も罷市すれば打こわしてもよろしい、罪はこちらで負う、ただし明日開店してもうちこわすものがあれば、匪賊としてとりしまると諭したので郷民は解散した。<sup>47)</sup>

隣宣城縣では、五月より六月にかけて饑民の群集の搶掠が頻發し、とくにミズリヤ襲坊を襲つて米を掠奪した。<sup>48)</sup>また、北安徽の蒙城、鳳臺の各縣では、饑民の流入によつて土匪の活動が盛となり、懷遠、鳳陽などの諸縣にまで騷擾が及んだ。<sup>49)</sup>

江蘇省の清江縣では、三月次の如き匿名の揭示がはり出

された。「江北はしばしば災荒をうけ、貧民は一日を一年の思ひで暮してゐる。積穀の多いことでは大豊製粉會社に如くものはない。すでに按察使、知縣に請願して、大豊製粉會社に行つて小麦粉をもつて命をつなぐ許可をえた。本月(三月)八、九日、一緒に該會社に行つて食にありつくことにしようと思う。これは約束せずして意見の一致するところであらう。必ず期限に違わぬようにして、溝壑に餓死するを免れよ!」。また一方各鄉村に「賑濟饑民、大口若干斤、小口若干斤、限定初八、九日、前往本廠取麵、勿誤云云」と書いた大豊製粉會社の證明書<sup>50)</sup>を偽造して配布した。八日朝南北郷一帶の饑民四百餘人が手に手に袋と銅元十數枚もつて集り、石を投げて門や窓をこわし、煙突をひき倒した。十三日には饑民數千人が海州の海豊製粉會社を襲い、十四、五日と反復襲撃して官兵に彈壓され、また徐州の永豊製粉會社も襲われた。<sup>50)</sup>

江西省でも各地で米穀店が襲われた。中でも撫州では、三月にはいつて米價騰貴し、十五、六日は一日に三回も米價があがつたが、十七日に米を積んで下る船が百數十艘におよんだ。附近の郷民は米の移出禁止を求めたが米商がか

えり見ないので、十八日知府が用のため城外に出たところを郷民數千がとりかこみ、米の積出し禁止を要求した。知府は急に城にかえり、首謀者九人を拘引した。郷民數千人は府署におしかけ、九人の釋放を要求し、また米穀店十三軒を掠奪した。<sup>51)</sup>

湖北省でも、崇陽縣、沔陽州、<sup>52)</sup>廣濟縣、武穴鎮などの各地に米穀店や富戸の掠奪があった。しかし、この種の騒亂では湖南省長沙の事件がもっとも重大であった。<sup>\*</sup>

\* 以下の記述は、長沙の某氏が上海時報に寄せたもの（東方雜誌、七ノ五に轉載）により、他の記述でこれと異なるものを註記した。

湖南省は宣統元年夏洞庭湖岸一帯が水災をうけて不作であつた上に、また同じく水災を被つた湖北への米の移出や、値上りを見込んだ商人の買占めによつて米價が騰貴し、宣統二年正月には一升（わが國の六合弱）六十餘文、二月初には七十餘文となつた。湖南の郷紳は巡撫岑春煊に米穀の移出を禁止するよう請うた。岑巡撫は二月七日に禁止の公示をしたが、規定によると、公示後二十一日の二月二十八日から効力を發生するものであつた。故にこの期間中に華洋の

商人によつて積出される米はますます多く、このために三月初には八十餘文に騰貴するに至り、不手際な岑巡撫の處置に對する不平が高まつた。長沙、善化兩知縣は、早急に平糶を行うよう請うたが、巡警道の賴承裕は、新米收穫の時期までにはなお間があり、倉米も多くないので、早く平糶をやつてしまうと後がつずかないからというので四月中旬に倉を開くべきであると主張してきかず、兩知縣は勸業道から巡撫に頼んでもらつて、やつと許を得た。しかし、碾米、造冊、發票の手續は早急にできるものではない。たまたま南城外の貧戸が七十文をもつて利源店で米一升を買うとしたが、錢が不足だといつて賣らなかつた。南城外には貧戸が多かつたが、これを不平に思い、二月三日夜數百人が集り、その警察分局に行き、値段を安くして平糶するよう要求した。善化知縣はこれを聞いてはせ赴き、數日後開倉平糶することを許し、すぐ平價を公示し、米店の責任者に翌日からその値段で賣るよう通告したのではじめて解散した。四日善化知縣は賴道台を訪い、右のことを報告した。賴道台は知縣と共に岑巡撫にあいに行ったが、いずれも事を起したものを逮捕しなかつたのをなじられた。

知縣は、貧民はただ平價を求むるのみで、逮捕處罰しなればならぬようなものではない、といったが、岑巡撫はなおも逮捕を命じた。縣署に歸つて朝食をすますと、賴道台から電話で、南門外でまた人が集っているから、すぐ行って逮捕しようとのことであつた。すぐはせて南門外の巡警分局に赴くと、數十人がだまつて立っているの、すでに數日中に開倉平糶することを公示し、各米店もすでに減價を承諾している。お前たちはまた何を要求するのか、と諭すと、皆散去した。そこで巡警分局にはいつてはなししていると、まもなく門外にまた人が集っていると報せてきたので、いろいろ問い正していると、消防所長龔培林がきて、賴道台の命により、四十名の緝男トウナをつれて逮捕に來たが、さきごろ一人の者が街上で撫憲を誹謗していたので、とらえて城中に送った、と話した。知縣は、騷擾するものは逮捕してよいが、ただ口頭でかれこれいふだけなら逮捕すべきではなさそうである、といった。その時長沙協（副將—瑞楊摺）の楊明遠も來て、知縣とともに出て群集を諭した。群集は、「今逮捕された者を釋放していただきたいだけです。この人は姓を劉（永福—瑞楊摺）といい大工です。もし

拘引されると、妻子が食べるすべがありません。もし罪があるなら、ここへ連れてきて懲罰處置して下さい」と言葉も甚だおとなしいものであつた。知縣は龔培林に、城内に行つて、この者をつれて來て處置しよう頼んだが、永らく待つても來なかつた。\* \*また皆の前でこの者を釋放してほしい旨の封書の手紙をかき、團總の慶某の手で賴道台にとけさせたが、また返事がなかつた。その時はもう暮方になつていたが、聚るものはますます多く、皆「この人はきつともう殺されてしまったのだ」と思つてさわぎ出し、分局内におし入つた。知縣がこれをなだめ諭していると、突然に賴道台がやつてきて、轎を下りて局内にはいるなり、このさわぎに腹をたてどなりちらし、數人をとらえて靜めようとしたが、平素警察行政を掌つて評判のよくなかつた道台のこととて、群集（數千—瑞楊摺）はついにこれをふくろたたきにした。（楊明遠副將は身をもつてこれを遮蔽し、また毆傷を受けた—瑞楊摺）知縣はこれを阻止しようとしたが前に出ることができない、さいわい平素から人望があつたので、皆「この方はよいお役人さんだ、無禮してはいかんぞ」といつて周圍をさえぎり、おし合をさせなかつた。知

縣は小役人に命じて道台を救出させ、後門から近所の尼庵に避難させたが、群衆はまたそこへおし入り、知縣に、城内にかえって逮捕された大工を釋放して下さるようたのみ、すぐ道をあげたので、知縣は轎にのって城内にかえり、莊布政使に謁して、兵役をやつて頼道台を救うようたのだ。頼道台は尼庵で群衆にかこまれてどうすることもできなかったが、一人の從兵が巡警の服をぬいで群集中にはいりこみ「こいつをなくしても無益だ、ひっぱつて行つて撫台にあうのが一番よい」といって頼道台を背負い、馳せて城内にはいり、按察使衙門にころがりこみ、門を閉めてかくれてしまった。その時はもう暗くなつていたが、後からついて行つた群衆は、ほんとに巡撫にあうためにいったものと思ひ、一齊に巡撫衙門の外門をおし入った。

これらの群衆の中には、眞の貧民も固より少くなかつたが、實は痞徒ナラズモが多く、その上各種の勞働者、手工業者が仕事を終つた時刻だったので、各處の痞黨が事件をききつけてどんどん集り、飯を食わせ、巡撫をひき出して殺せなどとなつていた。しかし手には何ももつていなかった。

文武の官僚はこの事をきいて巡撫衙門にかけつけ、「五

日後開倉平糶、價六十錢一升」という牌を出したがすぐこわされてしまった。改めて「明日平糶、五十錢一升」と出したが、これもこわされた。また「許放所拏之人、而此人已由警務公所帶至南門城樓、一時無人可放」と出すと、群衆はさわぎ出してついに門をおし入り、また外門、照壁ツイタチカベをこわし、旗竿をきり、石獅コイヌをたたきこわし、これを防ぐ衛隊には石を投げつけた。岑巡撫は常備軍、巡防隊を召して衛らせた。軍隊は空砲を放つて威嚇したが、却つて石を投げつけられた。夜が更けて群衆の倦むのが期待されたが、解散しないのみでなく、各地の確坊コネツキヤが掠奪された。また一揆チヨイチンのものが、各舖戸に命じて家毎に燈を出させて往來に便にし、「明日は店を開くな、開くとうちこわすぞ！」などといつて歩いた。翌五日（早朝岑巡撫は、長沙府、長沙縣、善化縣の知府、知縣に命じ府下の郷紳、各團總、各碓房米舖をあつめて平糶の方法を協議させ、碓坊が官倉から穀を受取り、それをついて賣出す。官穀は一石二千文、精白した小賣値段は一升四十文、平糶局の開かれるまでの一時的辦法とした。また各團總に命じ、家毎によく諭して、子弟、傭工を外出させないようにさせた。―瑞楊摺）城内、城外の店は皆罷市した。九時頃には群衆は撫署の大

堂におし入り手あたり次第にうちこわした。岑巡撫はやむを得ず軍に命じて一發うたし、二名を殺し數名を負傷させた。群集はこれを口實に、ますます激昂した。そこで郷紳を集めて協議したが、郷紳は、發砲したのがいけないといつて岑巡撫を非難したので、死者には銀二百兩、負傷者には四十兩を出すことにし、これを撫署に公示するとともに四言の告示を、高脚牌に書いて街を歩かせた。そのなかに「衆紳公議、平糶仰寬、落臺擔任、諸君請退」という文句があった。これによつて岑巡撫が發砲しないことを知つた群集はとつてきた石油をかけて放火し、ます齋奏廳ウケツケや一ノ門一帯を焼いた。常備軍は事の急を見て一發放つて數人を死傷させた。岑巡撫は、屋上に上つてゐる者をうつよう命じたが、遂にまた發放させなかった。そこで、軍隊はそれを取りまき、銃をもつて上を見守るのみで、二時間もたつ間には明以來の大衙門もやけおち、ただ後方の上房スライヤ一棟だけが残った。そこへ痞徒五人が侵入して掠奪をやるうとして軍隊に捕えられたが、徒黨のものに強迫せられ、人をやつて引渡させたので群衆ははじめて退いた。岑巡撫は、家族を避難させ、自らも官印をもつて城外の別邸に退避し

た。そこへ布按兩使をはじめ主要官僚が入謁したが、銃撃すべきや否やについて意見一致せず機宜を失している間に、四出した暴徒は教會六個所、學校二個所を焚きはらつた。撫署で死傷した者は二十餘人あつたが、これをついで長沙、善化兩縣署に行き、かつ委員を派遣し、兩知縣がしらべて人數に應じて恤銀を給與するのを監督させ、恤銀を出さなければ屍体を受取つて埋葬することを拒絶した。岑巡撫は、電奏して莊布政使に巡撫の事務を署理させることを請い、すぐ事務を引渡した。莊布政使は再三辭退した後これをうけた。岑巡撫がこの處置に出たのは、郷紳がくちぐちに莊布政使の民望のあることをほめたからであつた。莊布政使が印を受けると、痞徒は附近の各爆竹店からとつてきた爆竹をあげて歓迎した。莊巡撫代理は人心をおさめることのみを考え、そのなすに任せたために、十時に撫署を焚いてより教會學校を相ついで焚き、日暮時になつても火はなおやまなかつた。その夜から翌六日朝にかけて南門外、西門外の學校、教會、日、英、米の商館、その躉船クルグ、倉庫、民家などを石油をかけて放火し、その火は終夜天をこがした。六日（朝）、省城の富紳を掠奪するという噂がとび、恐れた郷



紳は會議して暴徒を重罰に處することを主張しはじめた。―瑞楊摺―當局者ははじめて、放火掠奪の犯人は殺してもよいとの公示を出し、兵備道、長沙知府が朝命によつて城を出て街上で二人を捕えて斬り、長沙協副將、長沙知縣も二、三人を斬殺しはじめて痞黨はかげをひそめた。以上が長沙事件の概略である。

＊署湖廣總督瑞澂暫署湖南巡撫楊文鼎會奏遵查湘省痞徒擾亂地方文武各官辦理不善情形分別參辦摺（東雜、七ノ五、奏牘）の略稱

＊頼巡警道は先に岑巡撫に騷擾を起すものは何故逮捕しないかと詰責されていた上に、群集が釋放を強要するのはよろしくないといふので釋放を肯じなかつた。

＊各教會、學校を焚くときには、先ず隣家に大聲でしらせ、隣家でも延焼させないようにたのんだ。かれらは大工、左官で火道をたちきる方法を心得ていた。匪徒は多くなかつた。（餘記、二三―四頁）といわれている。

この暴動にはつぎのごとき諸原因がからまり合っているようである。

（一）郷紳と巡撫との不和。岑巡撫は「平日辦事、與紳不甚融洽、拒絕請託、亦間有之、紳遂積不相能」（署湖廣總督瑞澂奏特參籍紳私挾釀亂請分別懲儆摺―東雜、七ノ五、奏牘―以

下瑞摺と略稱）といわれ、郷紳は事件中巡撫に非協力であつたのみでなく、王先謙を筆頭として、葉德輝、孔憲教、楊鞏ら七名の郷紳は署湖廣總督瑞澂に、巡撫を易えるよう電請した（瑞摺）。もと四川省涪州の知州であつた楊鞏が公共建築を請負い、その下には多くの大工、左官らが組織されていた。（湖南省城亂事餘記―東雜、七ノ五、二三頁―餘記と略稱―の「又一稿言」の記載。）ところが、湖南諮議局の建築は湖北の土木業者が請負い（餘記、また瑞楊摺に「近因省城建築各項工程、爲外省匠人包攬、心益憤恨」とある）、このために楊鞏およびその支配下の大工、左官が憤慨していた。楊鞏と密接な關係のあつた孔憲教は、暴動の起つた初、巡撫は何故諮議局建築用の鉅資、並に諮議局經費、鐵道の資本金、各學校の經費をもつて窮民を救済しないのかといつて歓迎され、五日には、「停修鐵路」「停辦學堂」「撤警察、復保甲」「平糶」「開皇倉」「撤常備軍」の六箇條を岑巡撫に提出した（餘記）。この暴動に大工、左官らの参加が多かつたのも、巡撫を牽制して射撃させないようにしたのも、かかる郷紳の後援によるものらしい。また火事が起つても消防隊が出動しなかつたのは、

消防隊には組毎に大工左官が四名配屬されていたからであるという。(餘記)

(二)學校に對してはすでにのべたとき學捐の問題もあつたかもしれない。しかし、「其宗旨在反對新政耳」(餘記)とあるごとく、保守的な郷紳が、學校、教會、外國商館、領事館など新政に關係のあるものを仇視したによるらしい。諮議局に對する敵視も、單にその建築を請負うことが出来なかつたためのみではなく、鐵道などとともに近代的なものとして排撃されたものようである。電柱が多かつたき折られた(餘記、二二頁)のもこれにつらなる。

(三)米價騰貴による下層民の困窮。これについてはここでは多言を要しない。

この大暴動は嚴密には農民一揆ではなく、都市下層民が主体をなしていた。これに参加していた郷民は下層市民の暴動のかげにかくれてゐる感がある。

## 六 結 語

シュトゥルム・ウント・ドランク<sup>54)</sup>の時代といわれる日露戦後の中國において、祖國の復興をめざして行われた立憲

政治やアヘン禁止の政策が、農村において如何なる問題をひきおこしていたかについて、右にのたところはいささかその具体的な實情を提供するものである。

これらの新政は、善良な官僚によって行われたとしても、農民の負擔を加重し、農民の生活を奪うものであつたが、多くの場合右の諸例が示すごとく、貪官、汚吏、劣紳の私慾の口實に利用されたことが多く、そのために新政と農民との摩擦を激化させたのである。農民は「新政」を祖國復興の政策としてではなく、單にかれらの「生活を奪うもの」「新税を加徴し、新税加徴の口實をなすもの」として受取っていたのである。この限りにおいて、農民の政府に對するたえがたい不満が形成される原因があつたのである。しかも新政は、この不満が全國的に形成される契機となつた。ここに農民が全國的に革命運動に動員される原因があつたのである。農民にとっては、革命運動が如何なるものであるかは關知するところでなかつた。彼等には、現政府のこの苛政が除かれる何らかの希望が投げ與えられれば、それで彼等は動員されたのである。あの燎原の火のごとく全國に擴大された革命の風潮の原因も、一つはここにあつたの

である。孫文の「革命方略」<sup>55)</sup>に「掃除滿洲租稅釐捐布告」があり、その中で「凡租稅釐捐、一切不便於民者、悉除之、俾我國民得怡然於光天化日之下」とのべているが、これこそ農民を動員するスローガンである。しかし資金に窮した革命軍は、現實に農民のこの不満を満足させることは出来なかった。これは農民のみでなく市民にしにしても、同様革命軍に期待していたものが現實に與えられない不満があったのであるが、こうした不満がまた革命軍をして袁世凱と妥協せざるを得ざらしめた一つの原因ともなったのである。

(一九五三・一一・三二)

# 註

- ① 山口昇、清國情勢及秘密結社(寫本、外務省外交文書室保存)、第二卷第一章、農民問題
- ② 民政部奏調查戶口章程摺(東方雜誌以下「東雜」と略稱す一六卷一號)。大清光緒新法令、第一類、憲政。宣統政紀、第四、光緒三十四年十二月辛酉(十日)の條にその節略がある。
- ③ 記江西調查戶口風潮(東雜、六ノ八)、續記江西調查戶口之風潮(東雜、六ノ九)。三記江西調查戶口之風潮(東雜、六ノ一〇)。
- ④ 江蘇宜興縣鄉民焚毀學堂(東雜、七ノ三)
- ⑤ 安徽南陵縣鄉民滋事毆傷調查員(東雜、七ノ五)
- ⑥ 安徽南陵縣鄉民滋事餘聞(東雜、七ノ六)
- ⑦ 江蘇如皋縣鄉民滋事(東雜、七ノ八)
- ⑧ 浙江長興縣鄉民滋事毀劫學堂及教堂(東雜、七ノ八)
- ⑨ 雲南昭通府亂事續記(東雜、七ノ五)
- ⑩ におなじ。
- ⑪ 江蘇鄉民滋事餘聞(東雜、七ノ六)
- ⑫ 補記廣東新安縣婦女抗釘門牌事(東雜、七ノ八)
- ⑬ 劣僧亦思抗拒學務耶(東雜、一ノ十二)
- ⑭ この僧侶の抗拒に對して「彼僧人者、平日仰食社會、無所事事、欺騙財產以供淫樂。然則毀寺宇沒寺產以爲學堂、固至正之事也。顧乃不知讓避、悍然出其盜賊之行、而與學堂爲難、倘不立置重典、將來阻礙學界之事、寧有止耶。」とのべている。
- ⑮ 甲辰以前中國鬧學毀學之事見於學生、甲辰以後中國鬧學毀學之事見於愚民(毀學果竟成爲風氣耶—東雜、一ノ十一)
- ⑯ 記江西袁州鄉民暴動事(東雜、六ノ一〇)、江西袁州暴動餘聞(東雜、六ノ十一)
- ⑰ 二說未詳孰是、然其歛無名之費、填無底之囊、剝小民之膏血、以肥官紳之身家、則昭昭無可掩矣。(東雜、六ノ一〇、三二一頁)
- ⑱ 浙江慈谿縣鄉民滋事焚毀學堂(東雜、七ノ四)、浙江鄉民毀學餘聞(東雜、七ノ五)
- ⑲ 浙江於潛縣鄉民滋事擄去紳董數人(東雜、七ノ一〇)
- ⑳ 浙江長興縣鄉民滋事毀劫學堂及教堂(東雜、七ノ八)
- ㉑ 廣東連州鄉民滋事焚毀學堂(東雜、七ノ一〇)

②① 憲政編查館奏核議城鎮鄉地方自治章程並另擬選舉章程摺（東雜、六ノ一）および大清光緒新法令（第一類、憲政）には、自治章程の全文が出ている。宣統政紀、卷五、光緒三十四年十二月戊寅の條

②② 光緒東華錄、卷二一九、八月甲寅朔の條  
籌備事宜の必要な條項を摘記すると次のごとくである。

第一年	籌辦諮議局、頒布城鎮鄉地方自治章程 頒布調查戶口章程、
第二年	舉行諮議局選舉一律開辦、頒布資政院章程舉行該院選舉、 籌辦城鎮鄉地方自治設立自治研究所、頒布廳州縣地方自治章程、 調查各省人口總數、
第三年	召集資政院議員舉行開院、續辦城鎮鄉地方自治、 籌辦廳州縣地方自治、彙報各省人口總數、編訂戶籍法、
第四年	續辦城鎮鄉地方自治、續辦廳州縣地方自治、 調查各省人口總數、
第五年	城鎮鄉地方自治限年內粗具規模、續辦廳州縣地方自治、 彙報各省人口總數
以下略	

②③ 城鎮鄉地方自治章程第九十條

②④ 同第九十二條

②⑤ 河南省密縣鄉民滋事拆毀縣署（東雜、七ノ四）

②⑥ 自治乃害百姓之舉。從前不辦新政、百姓尚可安身。今辦自治、巡警・學堂、無一不在百姓身上設法。從前車馬差使、連正項每畝錢百三十文、今則每畝加至三百二十文。現在又要百姓花錢、花錢事小、將來自治辦好、國家洋債、無一不在百姓身上歸還。此時萬不可答應。官紳串通來逼民反。（河南省葉縣因鄉民聚衆請兵——東雜、七ノ八一）

②⑦ 直隸州易州鄉民滋事焚毀自治局中學堂（東雜、七ノ八）

②⑧ これは自治研究所の經費を捻出するため  
に廟產三割を寄附させようとしたからである。

②⑨ 王景嶽は曲士文と同村で、警察署長となり、會計帳簿があいまいで、鄉民の間にかくの評判があつた。また、常に巡警に命じて鄉村に行つて賭博をとらえさせ權力をかさにきて人を苦しめていたものであるという（山東巡撫孫寶琦、覆奏萊陽海陽肇亂實情摺——東雜、七ノ十一）

③⑩ 山東萊陽縣鄉民滋事將鄉董房屋焚毀（東雜、七ノ六）、山東官兵與萊陽縣鄉民交戰殺鄉民數百人（東雜、七ノ七）、山東萊陽縣官民交戰事續聞（東雜、七ノ八）、山東萊陽縣官民交戰事餘聞（東雜、七ノ九）、山東巡撫孫寶琦覆奏萊陽海陽肇亂實情、奉諭、各官紳分別革職、巡撫孫寶琦免議（東雜、七ノ十）

## 一)

③① 山東萊陽縣鄉民滋事將鄉董房屋焚毀(東雜、七、六)

山東巡撫孫寶琦覆奏萊陽海陽肇亂實情、奉諭、各官紳分別革職、巡撫孫寶琦免議(東雜、七、十一)

③② 中國におけるアヘン禁止の必要領有べきものとみなすのことが Cameron, M. E., The Reform Movement in China 1898—1912, pp. 136—159, The Campaign against Opium, がある。また、中國人のアヘン嗜好は體質から由來するもので、キリスト教徒のこのき passionate な enthusiastic な態度では practical な解決はむきならず、この立場なら論ぜられたもの Bland, J.O.P., Opium Question(Recent Events and Present Policies in China, Philadelphia, 1912, pp. 423—57) があり、社會學者が自らの觀察をもつて書きたサイヤミッシュな興味深さの Ross, E. A., Grapple with the Opium Evil (The Changing Chinese, N. Y., 1911, pp. 139—73) がある。また、中國における禁止政策の進展の實体について、

China. No. 1 (1908), Correspondence Respecting the

Opium Question in China.

" No. 2 (1908), Despatches from His Majesty's Minister in China Forwarding a General Report by Mr. Leech Respecting the Opium Question in China.

" No. 1 (1909), Despatches from His Majesty's

Minister in China Forwarding a General Report by Sir Alexander Hosie Respecting the Opium Question in China.

" No. 3 (1909), Despatches from His Majesty's Minister at Peking Forwarding Reports Respecting the Opium Question in China.

" No. 1 (1911), Despatches from Sir A. Hosie Forwarding Reports Respecting the Opium Question in China.

③③ 諭内閣、自鴉片煙弛禁以來、流毒幾徧中國、吸食之人、廢時失業、病身敗家。數十年來、日形貧弱、實由於此、言之可爲痛恨。今朝廷銳意圖強。亟應申儆國人、咸知振拔、俾祛沈痼、蹈康和。著定限十年以內、將洋土藥之害、一律革除淨盡。其應如何分別嚴禁吸食、並禁種罌粟之處、著政務處、妥議章程具奏。(德宗實錄、卷五六三、光緒三十二年八月丁卯の條)

③④ 光緒東華錄、卷二〇三、光緒三十二年十月戊寅の條、大清光緒新法令、第五類に記載されている。こゝで關係のある栽培遞減の規定である第一條はつぎのことである。

限種罌粟、以淨根株也。罌粟妨農、爲害最烈。中國如四川・陝甘・雲貴・山西・江淮等處、皆爲產土最盛之區、其餘諸省亦幾無地蔑有。現定以十年禁絕吸食、自當先限栽種、庶吸食可期禁絕。應由各督撫分飭州縣、確查境內向種罌粟之地其若干畝、造冊詳報。凡向種罌粟之田地、嗣後永遠不准再種。其

業經栽種者、給予憑照、令業戶逐年減種九成之一、視其土性所宜、一律改植他項糧食。尤在州縣官、不時周巡、其憑照一年一換、統限九年內、盡絕根株、違者即將原地充公。如未滿十年之限、能將轄境內種煙地畝勒禁、全行改種他糧、查明屬實、准將地方官分別奏獎。

③5 China No. 2 (1908) p. 12, 光緒東華錄、卷二一四、光緒三十四年二月癸酉の條にこの協定の内容が記載されている。五千百箱は、一九〇一より五年に至るインドから中國への平均輸出を五萬一千箱と計算し、その十分の一である。

③6 德宗實錄、卷五八七、光緒三十四年二月丙子(二十日)の條。

③7 大清光緒新法令、第五類、禁煙。ここに關係のある條項は左の如くである。

第一條 各省應飭地方官、將境內現種罌粟地畝、確切調查畝數地主姓名及收穫多寡、於六個月內、分造清冊、由各該督撫彙報度支部並分報民政部、各一分存查。

第二條 禁煙定限十年、係自光緒三十二年(即一九〇五年)起。此次各省減種辦法、應遵照政務處奏定章程、除向非種罌粟之田、永遠不准再種外、其向種罌粟地畝、按照三十四年冊報數目、每年減少八分之一以上、統限於光緒四十一年、盡絕根株、並隨時將某處某姓田畝改種何項植物、詳細報部。

第三條 各省應印製鴉片栽種憑照、由各地方官發給各種戶收執、每年更換一次。其未領憑照私行栽種者、一律查禁。種煙各戶、於呈領栽種憑照時、應按每畝、納費

制錢十五文、此外不得分毫需索。

第十八條 各省地方官、能將境內栽種罌粟地畝膏土各店及吸煙人數、於一年以內減至十分之三以上、且並無騷擾情事者、查明屬實、准由各該督撫奏請交部從優議敘。

③8 China No. 3 (1909) p. 7, Max Müller の報告中に記載あり。

③9 溫州鄉民暴動記聞(東雜、七ノ三)、補記溫州禁煙擾民事(東雜、七ノ五)

④0 補記溫州禁煙擾民事(前掲)

④1 浙省匪亂瑣聞(東雜、七ノ九)

④2 山西交城文水兩縣鄉民暴動經官派兵剿殺(東雜、七ノ三)

④3 宣統政紀、卷三八、宣統二年七月乙巳(四日)および壬子(十一日)の湖廣總督瑞澂の上奏は湖南、湖北の水災をのべ、同七月丙辰(十五日)の上諭は安徽の水災についてのべている。

詳細には安徽湖北水災記(東雜、七ノ七)、各省水災彙記(東雜、七ノ八)、安徽災荒一般(東雜、七ノ十一)。たとえば、嘉興縣屬之王店鎮、平湖縣屬之新埭鎮、田稻亦傷盡、農民顆粒無望、其最甚者、售兒鬻女、藉此爲數口之活命、妻離子散、無日不有、……(各省水災彙記)

羅炳生教士皖北災象報告、此次皖北百姓多言、今年災狀爲歷史上所罕見。以今年夏秋之交之暴雨、實爲歷史記載中所罕見。故秋禾全數、悉被淹沒、核其面積、約佔七千英方里之廣、人民之被災而無衣食者約有二百萬。近數月來、死亡之慘、日甚一日、……(安徽災荒一般)。……昨夏揚子江及漢水一帶洪水ノ厄災ヲ被ルヤ武昌、漢陽、黃州、德安、安陸、荊州ノ各地ハ殊

ニ慘烈ヲ極メ、身ヲ以テ逃レシ災民ハ數十萬ヲ數ヘ、……昨年末ヨリ本年ニ亘リ、飢民ノ漢口ニ集來スルモノ其數十萬ニ及ビ……今夏又又漢水ハ汜濫シタレバ、追追寒氣ニ向フト同時ニ湖北ノ窮民ハ愈多カルベク、現ニ漢口ノ米價ノ如キハ騰貴ノ絶頂ニ達シ官憲ハ西貢米等ヲ輸入シ一升十仙内外(商民ノ米ハ十五、六仙)ニテ賣リ出シツツアリ(山口昇、清國情勢及秘密結社、第二卷第一章、農民問題)

④④ 江南地方では、四、五年前には四十文内外であつた米價が、最下等米で昨年(宣統元年)夏は六十文、今春は八十文、今日(宣統二年秋)は百文を起えるに至つたと山口昇は報告している(前掲書)。

湖南省長沙でも、前四十餘文の米が、宣統元年夏の洪水で騰貴しはじめ、翌年の三月初には八十五、六文になり、後にのべることき大亂となつた。

④⑤ 御史趙炳麟は宣統二年夏の状態をつぎのごとく述べている。臣省親至湘、目觀湖北、流民不下二十餘萬。湖南省城、人心粗定、而鄉間乏食、十室九空、搶米之案、日數十起。又聞江南海州等處、饑民圍城、人心動搖。兼之南方久雨、又將爲災。湖南之茶、損傷殆盡、湖北之麥、收穫無期、不知明年是何景況。(奏請飭議前奏確定行政經費並予籌安紳流民之策摺—東雜、七ノ五、これについての上諭が、宣統政紀、卷三五、宣統二年四月壬辰—十九日—の條に出ている)。

④⑥ 安徽省蒙城鳳臺各縣の土匪の活躍(東雜、七ノ八、七ノ九)

④⑦ 安徽南陵縣商人罷市鄉民聚衆滋擾即解散(東雜、七ノ三)

④⑧ 安徽宣城縣饑民搶劫鹽坊(東雜、七ノ七)

④⑨ 安徽蒙城鳳臺各縣土匪滋事(東雜、七ノ九)

⑤① 江蘇清江鄉民行劫大豐麵廠未成(東雜、七ノ四)

⑤② 江西撫州府鄉民滋事搶毀米肆(東雜、七ノ四)

⑤③ 湖北沔陽州饑民滋事經官派兵彈壓互有殺傷(東雜、七ノ六)

⑤④ 各省搶米風潮(東雜、七ノ五)

⑤⑤ 高橋勇治、孫文(東洋思想叢書)七六頁

「革命方略」は、池亨吉、「支那革命實見記」の附録におさめられたるものによる。「支那革命實見記」は宮崎博士より借覽せるものである。記して謝意を表す。

(附記) 昭和二十七年に於ける文部省科學研究費による研究の一部である。

## **The Agrarian Disturbances in the Days of the Chinese Revolution of 1911**

*Yoshihiro Hatano*

The Chinese nationalism which arose after the Russo-Japanese War took the form of constitutional and anti-opium movements. The movements were led by former returned students from Japan and the West and by university students in China. These movements caused agrarian disturbance against reforms. The census-taking and establishment of schools as a foundation for constitutional government caused extraordinary taxation and encouraged corruption of the officials. Farmers lost a source of cash income because of the prohibition of opium cultivation. Moreover the flood of Yangtze River in 1910~11 damaged the farm-villages. The rising price of rice caused rice riots in many places. These dissatisfactions of farmers just before the Revolution of 1911 contributed to their support of the revolutionalists against the constitutionalists.